

青木ヶ原樹海エコツアーの評価とエコツアーガイドの臨機応変的対応  
 The Evaluation of the Ecotourism in Aokigahara Jukai Forest in Japan  
 and the Flexible Response of Guide Worker

浜 泰一\*, 白石 幸江\*\*

HAMA Yasukazu\*, SHIRAISHI Sachie\*\*

\*東京大学空間情報科学研究センター, \*\*ひめねずみ社

[要約] エコツアーガイドは、エコツアーの実施計画に従いつつも、臨機応変な対応で場を和ませ、時には盛り上げ、安全にツアーを完了させ、かつ教育効果を上げることが求められる。しかし、どのような対応がなされているのかは明確になっていない。本研究では、山梨県鳴沢村にある青木ヶ原樹海で実施されたエコツアーに、複数の記録者を同行させ、その内容をペンで書いて記録した。これにより、エコツアーの教育目的が達成されているのかを評価しつつ、想定していなかった場面がどのような状況で起き、ガイドがどのように臨機応変に対応していくのかを明らかにしようとした。結果、記録が複数になっても、内容・評価は概ね同じになっており、これらは信頼できると考えられた。また本エコツアーでは、教育目標が達成されていた。また臨機応変的対応を特徴づけるものとして、「特徴的な解説」「ガイドによる注意」「盛り上げる or 工夫」「生徒の声を拾う」が得られた。

[キーワード] エコツアー, 青木ヶ原樹海, エコツアーガイド, 臨機応変的対応

1. はじめに

Boo(1991)は、エコツーリズムを、「保護地域のための資金を作り出し、地域社会の雇用を創出し、環境教育を提供することにより、自然保護に貢献する自然志向型の観光」と定義している。この定義は、エコツーリズムという言葉が定着する以前からある「エコツーリズムの理念」を表しており、「エコツーリズム」という観光を行う上では、環境教育は重要なツールであることを意識すべき、ということであると考えられる。

武(2010)は、多くの文献を調べ、エコツーリズムでは、環境教育を行う上でエコツアーガイドが重要な役割を担っていることを明らかにしている。また武(2010)は、エコツアーガイドには、自然環境に関する高度な知識や自然と人間の営みへの理解と知識はもちろんインタープリテーションやエンターテインメント能力、安全管理に関わる知識・技術等が必要であることを明らかにしている。

ところで実際に行われるエコツアーには、

以下のような特徴があると考えられる。まず学校教育と違って、エコツアーの参加者にとっては、そのツアーがたった一度きりの体験であることが多い。また、そのためエコツアーガイドは、参加者のレディネスがわからない状態でエコツアーを実施しなければならない。また野外で行う場合は、天候の違いなどにより、見せたかったものが見えないといった様々な状況も出現しがちである。

このような条件でもエコツアーガイドは、エコツアーの実施計画に従いつつも臨機応変な対応で場を和ませ、時には場を盛り上げ、安全にツアーを完了させ、かつ教育効果を上げることが求められる。

ここで既往研究をエコツアーガイドに関する既往研究を概観する。エコツアーガイドの役割に関する文献は、武(2010)以外にも、Weiler&Davis(1993)や Yamada(2011)がある。また、環境教育で最も必要なインタープリテーションについては、様々な評価の仕方を整理した山田・Ham (2004)や個人のインター

プリテーション活動を紐解いた古瀬ら(2014)、インタープリテーションの内容がどの程度海岸の管理に役だったのかを調べた松島(2007)などがある。また、教科書的な書籍も複数出版されている(例えば、津村ら2014)。

しかし、どういうことが、エコツアーの実施計画で想定していない場面で起きるのか、そのとき「臨機応変な対応」がどのように行われるのかが、具体的に書かれた文献は、見当たらなかった。

そこで、本研究は、後述する富士山北麓青木ヶ原樹海で行われるエコツアーを対象に、想定していなかった場面がどのような状況で起き、エコツアーガイドがどのように「臨機応変に対応」していくのかを明らかにし、状況を整理することを目的とした。またその際には、エコツアーの教育目的が達成されているのかを評価するようにした。エコツアーの教育目標が達成されているかどうかは、臨機応変的な対応の善し悪しにも深く関係しているからである。

海津(2011)によると、日本国内には数万人規模の専業・兼業のエコツアーガイドがいると推計されている。当然、望ましいエコツーリズムを発展させていくためには、ガイドスキルを上げることが求められる。具体的な教材のようなものがあれば、効率的に人材育成も可能になると思われる。本研究は、エコツアーの一事例を対象にしたものだが、先述のように、未だエコツアーの具体的な場面がほとんど紹介されていない中では、そのような教材の一部になり得ると考えた。

## 2. 研究の方法

### (1) 研究の対象

本研究におけるエコツアーのコースは、山梨県の鳴沢村にある「鳴沢氷穴」を出発し、青木ヶ原溶岩流の「末端崖」、樹海が見渡せる「木曾馬合流地点」、富

士山と樹海が見える「紅葉台」を経て、「コウモリ穴」洞窟に至るおよそ2時間30分のコースである(図-1参照)。この間は主に青木ヶ原溶岩流の上に成立した青木ヶ原樹海の上を歩くことになる。このコースは、2004年に制定された「富士山青木ヶ原樹海等エコツアーガイドライン」(以降、「ガイドライン」と記す)に則ったコースになっている(川元2008)。

本研究の対象は、愛知県から富士山北麓青木ヶ原樹海に修学旅行で訪れた、2つの中学校(A中学校、B中学校)の生徒に対して行われたエコツアーである。このツアーに参加した生徒は、富士北麓地域で複数設定された活動の中から、このツアーを選択している。

エコツアーガイドは、筆者のひとり白石で、白石は愛知県からの修学旅行生に対するエコツアーを数年にわたり担当している。毎年担当する生徒は違うが、この地区の学校のことはある程度理解できているので、生徒のレディネスがまったくわからないというわけではない。A中学校、B中学校の中学生は、それぞれ複数のグループに分かれている。これは、先にも触れたガイドラインの人数制限を考慮しての措置である。白石は、A中学校(18名)、B中学校(14名)のそれぞれ1グループを担当していた。

A中学校のエコツアーは2017年6月13日、B中学校は同じく、17日に実施された。



図1 エコツアーのコース

(2) エコツアーの実施計画の作成

「臨機応変」であることを考えるために、そうではない、計画通りのエコツアーを確認しようと考え、時間の流れ、実施内容などがわかるような詳細な実施計画を作成した。

まず、エコツアーの教育目的を次の2点のように設定した。①青木ヶ原樹海の成因と植生の関係を結びつけて理解する。②樹海や周辺に住む哺乳類の特性を言うことができる。

次にどのような気持ちを持ってもらい、教育目的につなげるのか、という、エコツアーにおけるインタープリテーションのポイントを、次の3点のように設定した。表現が、「生徒にこのような気持ちになってほしい」という形になっている。①ここの地形・地質はどうしてこうなったのだろう、②この植物はどうしてここに生え、この動物はどうしてここに住むようになったのだろう、③理科の勉強を覚えていて良かった。

ここでエコツアーの教育目的達成に関係が深いと考えられる内容だけ紹介する(図1参照)。

まず、鳴沢氷穴からそれに続く森の中では、地面の凹凸や木の根の様子から、地質と植物の関係、植物が使える水の量を考えさせる。

溶岩流の端に当たる「末端崖」では、地面の凹凸や植生が変化していることを気づかせる。その後の木曾馬分岐では、高台から青木ヶ原樹海を見下ろし、溶岩が流れてきた様子を想像させる。紅葉台では、富士山の眺めを楽しませるとともに、モグラの生息域拡大を阻む溶岩の解説をする。そして、コウモリ穴に向かう森の中では、食痕などをたよりに森に暮らす生物の解説をする。

これを受け、白石が、本稿のもうひとりの筆者である、浜ひとりに、2017年6月5日にモデルツアーを行い、実施計画通りにエコツアーが行えるのかを確認した。

この後、2の(3)で述べる「評価シート」を作成した(図2参照)。これは、エコツアーの内容を記録するためのものである。

(3) エコツアーにおけるデータ収集

エコツアーに関するデータは、次のような形で収集した。まず、白石が担当するエコツアーのグループに対し、2人以上の記録者(エコツアーの評価者でもある)を同行させた。これは、内容の見落としや、偏った評価を防ぐためである。ただ、エコツアーは先述したガイドラインに則って実施されており、ひと

時刻	場所	ガイドの行動	項目	内容	技術的要素	①ガイド内容への関心				②内容の理解			ガイドの臨機応変な対応
						多くの生徒が関心がある	関心の深い生徒が多い	関心の浅い生徒が多い	全体に関心がない	多くの生徒が理解できた	理解できない生徒が多い	全体で理解できていない	
8:45	鳴沢氷穴前(バス下車)	合流	教員に対する連絡 運転手・ガイドに対する連絡 氷穴に対する連絡	持ち物、トイレを指示 集合場所と時間を確認 入浴料の支払い									
		停止して解説	持ち物の確認	帽子 飲み物 汗拭きタオル 軍手 懐中電灯 カマフ									
9:00	鳴沢氷穴前	トイレ	ガイド自己紹介	トイレは氷穴後詰点まで無い 各自(ガイドは複数いる)、名前と一言									
		停止して解説	コース説明	コースの目的 みどころ 所要時間 行程 トイレの場所 高低差 グループで行動する 方圧が強い、教員が最後尾 道をそれない 解説ポイントでは集まる									
9:10	鳴沢氷穴前(氷穴入浴)	停止して解説	入浴時の諸注意	足下が滑る 天気が強い 強い ゆっくり動くこと 写真撮影は足を止めて 帽子・タオルは軍手を着用 浴槽でできた浴衣 水がしたたり落ちてくる									
		停止して解説	氷穴の注目ポイント	水が流れている 地下には水がある 昔は江戸時代を再現したブロック より階段の手前は天然水	全体が階段を下りるのを待つ								
9:30	鳴沢氷穴前(氷穴出浴)	停止して解説	参加者の感想をシェア	例)より階段が急だった 例)水が冷たいほど温度差がある 終点の幅狭い道でも、道しるべを体験できる									
9:40	東海自然	停止して解説	青木ヶ原の成り立ち 青木ヶ原の地質	青木ヶ原樹海は青木ヶ原溶岩流の上を生えている森のこと 青木ヶ原溶岩流は884年に富士山の中腹から噴出した(噴火) 玄武岩	写真パネル「噴火中の溶岩流」を使い、噴火当時は、幾んどどろで文字通り溶けた溶岩が冷えて、現在は森が覆っていることをイメージさせる 文字パネル「青木ヶ原溶岩流 西暦884年(貞観)								

図2 記録書(評価書)(一部)

りのガイドが受け持つことができる人数が制限されている。よって、今回の記録者は、A 中学校ではふたり、B 中学校では3人にする事とした。記録者は、全員、筆者が所属する研究室の大学院生であった。エコツアーの列が長く伸びるようなときは、複数の記録者で列の前後をカバーするように打ち合わせをしておき、記録の抜けがないように配慮した。

記録者は、エコツアーで行われた事実を「評価シート」にペンで書いていく事とした。具体的には、記録者それぞれが、「記録しよう」と考えたことをなるべく記録するようにした。その中には、ガイドが臨機応変に何か対応したことを含めてもらうようにした。「評価シート」には、図2に示してあるが、臨機応变的対応について、記入する欄を設け、ある程度自由に記載できるようにした。またそれに関わる生徒のふるまいや生徒の感情がわかるような場面があれば、それもなるべく記録するようにしてもらった。また記録中には、記録者どうしが会話をしないようにし、参加している生徒とも接触しないように心がけた。また極力、エコツアーの邪魔にならないように、その動きにも気をつけた。またエコツアーにおける「ガイド内容に対する生徒の関心」、「ガイド内容に対する生徒の理解」については、図2に示すように4段階で評価するようにした。記録用に写真を数枚撮影したが、ビデオ撮影などは、エコツアーの実施状況や中学生の反応に何らかの影響を与える可能性が比較的大きいと考え、本研究では用いなかった。

エコツアー終了後、記録者全員のデータを回収し、それらを比較して、最終的な記録及び評価とすることとした(最終的な「評価シート」は図3参照、ただしB中学校分のみ、A中学校も概ね同じような内容であった)。

### 3 結果

エコツアーの記録をすべて洗い出して、まとめると図3のような最終的な「評価シート」

ができる。これ以降、A 中学校、B 中学校、両方に共通していえることがほとんどであった。よって、ことわりがない部分は、両中学校のことを合わせて述べていく。

まず複数の記録者(評価者)の記録及び評価であるが、結果的には、記録者間で、「評価シート」の記述内容に大きな違いはなく、評価者の違いが記録内容の違いにはつながってはいないと考えられた。よって、本研究の記録内容は信頼性が高く、見落としなどは、考えにくいと思われた。この記録方法は、エコツアーに影響を与えず、ガイドラインにも抵触しないデータ取得方法として考えたものであるが、エコツアーのような野外での活動を観察する場合には、応用ができると考えられる。これはエコツアーの前に、研究の主旨、書くべき内容等を記録者(評価者)に、丁寧に伝えていたからであると考えられる。

次にエコツアーの評価であるが、本研究で対象にしたエコツアーに限っては、ガイド活動自体はとても適切で、前ページに記した教育目標を達成していたと考えられた。図3には記載しきれなかったが、先にも述べた4段階評価では、好ましい選択肢ふたつだけしか記録されていなかったことから、それがわかる。ただ、図3の記載にもあるが、長く歩いた後や話が長くなってくるところでは、「飽きてくる」生徒もいた。

最後に、記録されていた内容をすべてまとめると、図3のようになるが、それらをカテゴライズすると、「予定と違うこと」「特徴的な解説」「ガイドによる注意」「盛り上げる or 工夫」「生徒の声を拾う」「生徒の話・行動」に大別された。内容から判断すると、そのうち、「特徴的な解説」「ガイドによる注意」「盛り上げる or 工夫」「生徒の声を拾う」といったことが臨機応变的対応を特徴づけられるものと考えられる。以下に具体例を示す。

「予定と違うこと」に関しては、「来週登山道の雪かきがある」というような情報を指し、

生徒との会話の流れに合わせて盛り込んでいた。これらはもともと伝える内容を違う場面で話していたので、臨機応変的対応とまでは言えないと考えた。

「特徴的な解説」は、予定していた内容より発展的な内容の話をしていたところを指す。土壌と植生の関係の話は、予定に入っている内容だったが、植生の遷移が進んだ先の極相林の話や極相林内のブナについての話は、予定には入ってはいなかった。

「ガイドによる注意」に関しては、例えば、紅葉台からコウモリ穴の方に下っていくときに、歩きにくそうにしている生徒に対し、「足をハの字に」、「狭いところは必ず一列で」などという声かけなどを指す。紅葉台で下降時の一般的な注意はしていたが、それに追加する形の注意を行っていた。

「盛り上げる or 工夫」に関しては、予定にはなかった「ネズミの剥製」を用いるような場面を指す。これは、もちろん用意していたから見せることができたということではあるが、見せなくても、ツアーは進行できた。そういう点では、臨機応変的対応だったと言える。また、「(モグラの) 指の数は?」「5本(生徒)」、「ミッキーマウスの指の数は?」、「・・・4本」のように、モグラの話につなげて興味を引く様子も記録されていた。

「生徒の声を拾う」に関しては、オオルリの声がして、生徒が反応したときに、それを拾って「オオルリ」という名前を挙げ、その生態の解説をしているような様子を指す。

「生徒の話・行動」に関しては、ガイドのといった行動や発言ではなく、生徒についての内容である。しかし、これらは、間接的に、エコツアーの内容の善し悪しに関係するような内容が含まれていた。例えば、「歩行中、後ろの生徒は関係のない話で盛り上がる」、「足痛い」、「くじきそう」、「葉っぱにあたる」といったことが記述されていた。

## 参考文献

- Boo, E., 1991, Planning for Ecotourism, PARKS, 2(3), 4-8
- 海津ゆりえ, 2011, 「エコツーリズムとはなにか」, 『エコツーリズムを学ぶ人のために』, 世界思想社, 京都, 13-45
- 川元修, 2008, 「富士山青木ヶ原樹海等エコツアーガイドライン(2004策定)について」, 『山梨県環境科学研究所国際シンポジウム2007報告書』, 28-32
- 松島肇, 2007, 「北海道石狩海岸を事例とした公共海岸の管理におけるインタープリテーションの有効性に関する研究」, 『ランドスケープ研究』, 70(5), 523-526
- 武正憲, 2010, 「自然観光資源管理におけるエコツアーガイドの役割と能力」, 『環境情報科学論文集』, 24, 327-332
- 津村俊充・増田直広・古瀬浩史・小林毅編, 2014, 『インタープリテーション・トレーニング-自然・文化・人をつなぐインタープリテーションへのアプローチ』, ナカニシヤ出版, 京都, 190PP.
- WEILER Betty・DAVIS Derrin, 1993, 「An Exploratory investigation into the Roles of the nature-based tour leader」, 『Tourism Management』, 14(2), 91-98
- 山田菜緒子・Sam H. HAM, 2004, 「インタープリテーションの評価-評価の概念, 視点, および自然公園への適用」, 『野外教育研究』, 7(2), 1-12
- YAMADA, N., 2011, Why Tour Guiding is Important for Ecotourism-Enhancing Guiding Quality with the Ecotourism Promotion Policy in Japan, Asia Pacific Journal of Tourism Research, 16(2), 139-152

浜泰一、白石幸江 (2021. 3)

エコツアーで予定された内容			実施状況					評価			
時刻	場所	項目	内容	予定と違うこと	特徴的な解説	ガイドによる注意	盛り上げる工夫		生徒の声を拾う	生徒の話・行動	
9 30	鳴沢水輪前(水穴出洞)	参加者の感想をシェア								参加者の感想がシェアされているのかは不明	
9 40	東海自然歩道入口	青木ヶ原の成り立ち	写真パネル「噴火中の溶岩流」を使い、噴火当時は、熱々どろどろで文字通り「溶けた岩」だったものが、冷えて、現在は固まっていてこれをイメージさせる 文字パネル「青木ヶ原溶岩流 西暦864年(貞観4年) 長さ約30km、」「盆状湖」を使い、「土地」に歴史があり、独立単位や成立要因、人間の利用によって現在の環境が作り出されたことを伝える。 青木ヶ原樹海は青木ヶ原溶岩流の上に生えている森のこと		地帯は目的を持って作られている					文字パネルにみんな注目 ガイドの地図にみんなが注目	
		青木ヶ原の地質	青木ヶ原溶岩流は864年に富士山の噴火から噴出した(歴史書) 盆状湖		富士山の噴火・歴史					「何年と書いてあるかな？」 歴史のところで、華歌呼の話を交える また、「一番新しい噴火ー江戸時代ー文政の時代」で説明をする	「何年と書いてあるかな(年代)?」はみんなくも見ていた
		土地年齢1000年	噴火後約1000年を経て、一面の焼け野原からどんな森が育っているのかを、これから実際に歩いて見てみよう。✓								とりのグループが通ると気がそらされる
		自殺防止看板	年間自殺者数など 「他人事」ではないかもよ、などと。	自殺者の話はカット		ゴヨウマツ、ヒノキには火がつくことなどの例					
9 52	ギンリョウソウのある場所	青木ヶ原の土壌	遊歩道脇の木の根を観察✓ 土壌が厚い場所か少ない場所か 樹根が張りめぐって空気を合っている							校長先生「根が見える」	生物の方が地質より、生徒は興味がありそう
		常緑針葉樹の特徴	文字パネル「常緑針葉樹、ツカ、ヒノキ、コヨウマツ 水分・栄養・日光 1少ない 気温一低くてもOK 成長一遅い 様子植物✓ 土壌を厚く上げて、水の貯り方を観察✓ 常緑針葉樹という名にも葉を落とさない、尖った葉を持つ木が多く生えている✓ 樹根が浅い日光でも成長する		岩の話をする						「針葉樹」理科で習ったと答える 樹をよけて木を見上げてシダ植物についても「授業で習った」
		ギンリョウソウの生態	文字パネル「ギンリョウソウ ベニカサネ→ナラシ→ギンリョウソウ(三者共生) 土壌は薄い、微生物(菌類)などの働きで育つギンリョウソウなどが		植物についての質問をする						質問が気になる生徒、数人 うなずく生徒
		青木ヶ原の植生まとめ	文字パネル「土壌が薄い✓ 根が浅い✓ それぞれに適した植物が生えている✓ 地質や地形の条件が厳しく、順手に適さない木は少ない								
9 35	園道トンネル前	未確認	文字パネル「未確認」 溶岩流は流れては止まっていることを観察 「この土は、溶岩流に飲み込まれなかった丘を約20分歩き」と予告✓		「道の下の溶岩」	歩ペースについて注意 ガイド息切れ				パネルと位置が少しずつずれている?	
9 42	木曾馬分岐	紅葉台の地質	茶色い泥 溶岩流が来たので、古くからの土壌が残っている 地質は赤土 黒炭(2000万年ほど前に高度に堆積したもの)		種相林(アカマツ:第一段階、榎:第二段階、アサキ:第三段階)樹根・ブナについての話	剛木注意!				足をしりしりする	生徒はよく聞いていた アカマツ先生の話を盛り上げる
		紅葉台と人の関わり	文字パネル 「黒山 薪炭林、燃し木や炭など(生活、養蚕) 木を伐り薪炭の薪、薪炭を燃やして利用 近隣の人が黒山として利用✓ 樹海に比べて、明るく、いろいろな植生 50年くらい前までは黒山だった アラスカ 養蚕の広葉樹 噴火などの自然の要素だけでなく人為的な要素でも植生は変化する								
9 52	水分補給	紅葉台の植生									
10 00	紅葉台万葉歌碑	紅葉台の地形	「富士山火災復興マップ(富士交通省、富士初訪事務所) 富士山の植生の植栽はなだらかな 青木ヶ原樹海は一本植栽に見える✓ 右斜面のぼこぼこが樹火口 青木ヶ原溶岩流が溶岩流で止まっている 約100m、赤かくなが岩道で接続したとされている(クニマス)多量観察 写真撮影禁止		未確認登山道の雪かきがあるという情報 雪は2300mのあたりにある 現在は1100mのところに	水分補給を促す	富士山の色 「何色に見える?」				生徒「景色はきれい」 富士山の色(青緑)
		下山の注意	走らない✓ 小股で歩く✓ 足にそで、足の裏に力を入れて 道幅が狭い所や、橋がかかっている所があるの間に歩かず歩く 高気圧は約20m✓								
10 15	紅葉台万葉歌碑	樹海と紅葉台の生物(モグラの生態)	モグラは、土に穴を掘り、ミミズなどの土壌生物を食べている 樹海は溶岩でできているので、住めない✓ そこで、この樹海を植栽してコウモリの巣をせき止めて、イラストパネル「モグラの種類」イラストパネル「モグラの日本分布図」 これは俗に「モグラ戦争」と呼ばれている✓ では、皆さんが住む地域では、どんなモグラが住んでいるでしょうか		ガイド「コウモリは?」						
		樹海と紅葉台の生物(モグラの生態)									
10 55	西原民宿村 樹海遊歩道	樹海に棲む哺乳類、鳥、昆虫、植物の知識 その時々に応じて、イラストパネルフィールドサインを使用			ガイド:せうの神社で西原の解説:半分くらいが聞いている						
11 10	編織穴駐車場	教員に対する種連絡 参加者身支度 運転手・ガイドに対する連絡 入洞前を交代 連絡先:コウモリ穴			溶岩の話	ガイド:溶岩のパネルを用意 玄武岩とSiO2の話					
11 30	編織穴駐車場(受付前)	コウモリ穴の簡単な説明 その後、入洞する際にヘルメットを着用									
11 55	編織穴駐車場(受付前)	ヘルメット受領	青木ヶ原樹海、いかがでしたか? 何か質問はありますか?								
		今見た対比	1100年前に噴出した青木ヶ原溶岩流の地面と紅葉台の地面 常緑針葉樹の森と溶岩流遺跡の黒山の森 コウモリ穴 青木ヶ原溶岩流は、何度も噴火を繰り返した富士山でもめずらしく、「いつ噴火したのか」という記録がはっきりと残っている溶岩流です。 青木ヶ原樹海も、「いつ生まれたのか」がはっきりしている、とても面白い森です。今日は冬の溶岩流を、森を駆けまわりましたが、富士山はもっと昔に噴出した地面や、もっと最近噴出した地面があります。森も、樹海だけではなく、ブナの森や赤松の森など様々な森があります。そうしたことを比べて、面白いです。ぜひ、富士山の他の場所も訪れてみてください。 そして、皆さんが住んでいる刈谷市の地面はどんな歴史があるか、愛知県にはどんな地質(地質)があるか、もしかすると火山が噴出した所もあるかもしれません。 それから、どんな植物が多く生えているか、どんな野生動物がすんでいるか、そんなことを興味を持ってもらえたら、嬉しいです。 今日のガイドツアーはこれで終わりです。長い時間お付き合い下さりありがとうございました。								

図3 エコツアーの記録・評価 (B 中学校)